善正寺だより

〒:512-0902
三重県四日市市
小杉町1014
浄土真宗
本願寺派
善　正　寺
TEL:0593-31-1670
FAX:0593-32-0733

掲示板法話

一人は有限でもつながれば無限になる
仏さまはバラバラのわれらをつないで下さる

かつて「人間死んだらゴミになる」と言い放った人がいた。これは人間の心をなくした知的エリートの戯言だと思ったが、葬儀なしの直葬が増え、年金絡みの白骨化した高齢者の遺体が続々発見される事態がしきりに報道され、心痛めることが多かった。しかし、東日本大震災の悲話は我々に改めて人間の立ち戻るべき原点を教えている。

大震災で亡くなった人々の遺体を面影に近づけるよう復元して遺族の人たちから喜ばれた女性納棺師のことをテレビのドキュメンタリー番組と著書で知りました。笹原留似子著『おもかげ復元師』という本には、震災からかなりの日々を経て発見された損傷の激しい遺体をボランティアで三百人以上復元して遺族の方がたに生きる勇気と力を与えたことが綴られています。

十歳を頭に四人の子供を残してなくなったお母さんの遺体を子供たちは「こんなのお母さんじゃない」と直視できなかったそうですが、写真を見ながら損傷した顔を四時間もかけてほのかに笑顔を浮かべる生前の面影に復元しました。復元された遺体に対面したご主人がやさしく奥様の頬を撫でながら「ありがとうございます。これなら子供たちに見せられます」と泣かれたそうです。そして、恐る恐る亡き母の遺体に近づいた子供たちは「おかあさんだ」と言って泣き崩れました。だが、涙と共に母親との悲しい別れを受け止めることができた四人の子供たちは父親と共に平穏な暮らしを取り戻しました。今年のお盆を前に笹原さんが仮設住宅に家族を訪ねたとき、お父さんから九歳になる娘さんの夢の話を聞きました。

「この間、お母さんが夢に出て、言い忘れたことがあるっていうの」「どんな話だ？」って尋ねたら、「お父さんに有難うと言って！」という亡き母の言葉でした。亡き後でも、涙をいっぱい流しながら、つながり合って生きる世界があることを教えられます。

このような話をブログに書いたら、布教使のO先生が共感のコメントと共に贈って下さったのが『心のおくりびと：東日本大震災復元納棺師』（今西乃子著）、児童文学者が笹原さんの活動など、現地取材して描いた本である。

本の中で笹原さんは「人はつながっていたい生き物なんです」「ひとりの人間に“限界”はあっても、次の人につなげていけば“無限”になる」という涙と共に紡ぎ出された尊い言葉を残しています。

エゴむき出しならばバラバラになりがちな人と人をつなぐもの、その根源にみ仏さまがお働きくださってある。

悲しみの涙が安らぎの涙に変わるときがくる。そして「有難う」の涙になる。亡き人々が命がけで私たちを「人間らしい人間」にしてくださる。「涙」という字は「サンズイ」に「戻る」と書く。涙のご縁は「真実に戻る」ご縁ですね。

☆行事ご案内☆

10月の門信徒会例会

10月21日（日）夜7時半

① 報恩講の歴史とお勤め、領解文の解説
② 意訳のお経「ちかいのうた」「さんだんのうた」

◇キッズサンガ
10月6日（土）午後4時より お友達も誘ってきて下さい。　毎日夕方５時の鐘撞きは誰でもＯＫ　ガム付。年中無休

◇三重組コーラス　10月15日（月）午後1時半　智積西勝寺様　１１／５（月）１１／１５（木）夜西勝寺報恩講
１１／２２（木）西本願寺御堂演奏会

善正寺ホームページ「三重　善正寺」で検索.
「住職と坊守のつれづれ日記」が好評。開設4年1ヶ月で8万5千訪問、一日平均100ほど、悩み相談もOK。

☆長男潤爾の初著書『読んで旅するヨーロッパ』（三学出版）が日本図書館協会の選定図書に認定。いつか図書館で見かけるかも？２千円。歴史的考察を加えた本、表紙は若嫁

［一縁会テレホン法話］　059・354・1454お電話を！
５人の僧侶が週替わりで担当、３分間で法話が聞けます。

☆第2回善正寺門信徒展、百五銀行阿倉川支店ロビーに展示
今回も写真、絵画、布絵、書道など力作を揃えて展示。
１０月１ヶ月間の開催です。お友達と是非一度ご覧下さい。
☆名古屋別院750回忌法要　１０月７日（日）７名代表参拝
☆新『報恩講』１１月２日午前お非時、午後１時半、夜７時、３日午前１０時、午後１時三全仏婦　今年から日付けが変更

「亮爾」アサガオの前で

花火柄の服を着てご機嫌の亮爾

キッズサンガのお友達

夕方の鐘つきに集う子供たち

坊守スケッチ

自分と向き合う『心の眼』を持とう！

今年はオリンピックイヤー。日本中がひとつになって応援した。沢山の感動を共有した。中でもパラリンピックには、知られざる人間ドラマがあった。その中の一つ、毎日新聞の発信箱（９／５）の記事を抜粋して紹介しよう。

陸上５千ｍ（視覚障害）に出場した堀越信司選手。全盲の父親は、現在東京の大学で言語学を教える。父は生後まもなく眼球のガンが見つかった。「何とかならないか」と懇願する両親に、医師は「命をとるか目を取るかです。遅れると脳に転移します」と言い放って両目を摘出。その後結婚して長男信司さんを授かった。長男も父と同じ病気をもって生まれた。父は自分の時と同じように「命だけは助けて下さい」と懇願した。右目だけは摘出して、左目は弱視ながら残した。長男は子供の頃から運動が得意だった。自転車、サッカー、水泳、野球、何でも楽しんだ。ある日長男は「何で僕だけ片目が見えないの？こんなのなら生まれてこなければよかった」と父に迫った。初めて競争社会に触れ、他者との違いに直面したのだろう。父は「命だけは・・」と医師に哀訴したことを明かした。「君は片目が見える。お父さんの分もいろんなものを見て欲しい」と諭した。以降長男は障害と向き合い、明るさを取戻した。中学で陸上を始めるとメキメキ実力をつけ、次々に記録を更新。現在はＮＴＴ西日本の実業団陸上部で練習漬け。そしてついに北京、ロンドンと連続２大会のパラリンピックに出場する選手に成長した。父は「妻も私も陸上の才能はゼロ。これは遺伝しなかったのですね」と苦笑い。息子は世界の強豪に交じり、トラックを駆け抜けた。「父の分までも世界を見た」という勇姿。観客席では、母のガイドで、息子の快挙を「見」守る父の姿があった。

「僕は、生まれつき障害をもつ悔しさをバネにして生きてきた。その悔しさを感じ取るには、真剣に自分と向き合わなければならない。『闇雲に練習するだけではダメ。その意味や目的をはっきり理解して、練習に励め。障害に負けない強い意志をもち、光ある方向に歩め』と父は教えてくれた。今は父に感謝している」と、信司さんは語る。私達の眼は外にばかり向けられて、挫折の原因を他人のせいにする。自分の弱さ、醜さと真剣に向き合うことを恐れる。そんな時両親や恩師の適切なアドバイスがあれば、道を見失うことはない。しかし今はそれを望むのは難しいかも？ケータイやインターネットが普及して家庭の中から会話が消えたから。ありのままの姿をさらけ出す受け皿がなく孤立する。自分と向き合う『心の眼』をもつには、どうしたらよいのだろうか？それは私達一人一人が、生きる拠り所を求めて、仏法を真摯に聞く以外、方法はないと思う。

☆寄　稿

四日市市　川　崎　孝　一

☆大乗誌　読破誘う　菩提寺の
　住持著さる『巻頭法語』
☆蔓文字で　描写の『亮爾』に
「初孫」と「誕生」といふ　酒賜る
☆鈴虫の　残りの茄子か　パン食の
　あしたの汁に　弦月で浮く

四日市　釈　妙　水

☆大空の　襞（ひだ）に　消えゆく
　蝉時雨

♪三重組コーラス♪

☆練習・智積西勝寺様　午後１時半
１０月１５日（月）・１１月５日（月）・
※１１月１５日夜、西勝寺報恩講出演、
※１月２２日京都御堂演奏会９回目

キッズサンガ・杉の子合唱団

☆１０月６日（土）午後４時より、間違えないように。友達を誘って来てね！鐘撞きは年中無休で夕方５時。

☆ホットニュース☆

☆十月の一ヶ月間、百五銀行阿倉川支店ロビーにて『第２回善正寺門信徒展』開催。今回は新たに銅版画、布絵を加え、絵画、写真、書道など力作を展示。お友達と是非一度ご覧になって下さい。
☆10月7日(日)名古屋別院親鸞聖人750回大遠忌法要7名が代表参拝

☆長男潤爾の初めての著書『読んで旅するヨーロッパ・・イタリア、フランスを中心に』(三学出版・定価2千円、新発売)が日本図書館協会の選定図書に選ばれる。年間新刊書発行6万冊の中で選ばれるのは16％。近い将来図書館に並んでいるかも？ヨーロッパを単なる観光だけではなく、深い歴史的考察を加えた一味違った本。是非一度お読み下さい。
☆新刊本一縁会テレホン法話14冊目の本『**心おきなく迷っていける**』**発売中！**
☆**善正寺のホームページ**。「三重　善正寺」で検索可．毎日更新の「**住職と坊守のつれづれ日記**」が好評。開設丸4年1ヶ月)8万5千アクセス突破1日平均100訪問。悩み相談メールでも歓迎。

平成24年度今後の主な行事予定

◇「報恩講」11月2日午後1時半と夜6時半・3日午前10時・午後1時三全
仏婦報恩講　講師大畠信隆師（岸和田）
今年から報恩講が11月に変わりますので、よろしくお願いします。
◇「秋勧進」11月23日午前
◇「お内仏報恩講」12月1日(土)夜

☆　編集子より　☆

「善正寺だより」第二二六号をお届けします。◇「夏の暑さは我慢できるが、残暑の秋は身にこたえます」という声あり。北国でもかなりの暑さだったから仮設住宅ではさぞかし辛いことだろう。◇今夏グリンランドの氷床がほとんど溶けてしまったという。文明への自然の警鐘に耳を傾けたい。実りの秋は聴聞の秋、「心の眼」を開く秋にしたいと思う。

実りの秋如何お過ごしですかで、生後6ヶ月の初孫、亮爾は、手足をばたつかせ寝返りを打てるようになりました。離乳食も始まり、鏡遊びが大好きで、声を上げて笑い、誰にでも抱かれて全く人見知りしません。来年西本願寺の御正忌報恩講で披露される「御法楽詠進歌」の募集がありました。お題は「幼子」、早速私も応募しようと初挑戦。但し単なる叙景や身辺雑詠ではなく、法の讃嘆や親鸞聖人に関る歌という規定。毎日子守りをしているので題材には不自由しませんが、難いのは歌作りの才能だけ。作品を見た住職が「そんな単純な歌ではダメ、大乗歌壇を参考にしてごらん」と厳しいアドバイス。ちなみに私の歌は

「幼子の子守歌かな正信偈　寝顔安らか任せたいのち」、推敲の余地有りですが、孫の寝顔を見て私の素直な気持を詠みました。京大教授の山極寿一氏は「子守歌があるのは人間だけ、家族が一緒に食事をする共食と、子守歌で心を一つにする音楽は類人猿にはない人間独自の特徴。それに言葉が加わりコミュニケーション能力を高めた。そこに思いやりの心が発生。しかし近年ケータイやインターネットの普及で、目前の家族さえも見えない相手と交信して、思いやりの心を失いつつある。家庭が崩壊し、自己中心の人間が急速に増加した」と指摘します。子守歌を歌える幸せに感謝し有難く思います。　合掌

善正寺坊守拝

平成二十四年十月